

落語はお客さんどつくるもの コンサートのようない臨場感



落語家 春風亭柳之助さん インタビュー



落語家歴26年の春風亭柳之助さんが5月7・8日、花座で落語の公演を開いた。客の笑い声が弾け、和やかなムードで終えた公演後に楽屋を訪ね、落語と花座の魅力について話を伺った。

笑い上手に助けられる

「ずばり、落語の魅力を教えてください。」

落語はコンサートに近いものだと思います。知らない曲を聴くのも楽しいけれど、知っている曲が流れると「おっ」とうれしくなりますよね。

落語も同じで、初めて聞く話も展開が読めず面白いと思いますが、聞いたことのある話だと「別の落語家の時はなかった小ネタがある」「登場人物の性格が少し違う」といった細かい部分を楽しめます。

その日の演目は、高座

に上がって世間話や小話をし、本題の前にお客さんの反応を見る「まくら」の間に決めます。行ってみないと、どんな話か聞けるか分からないのも面白いところではないでしょうか。

「花座の高座に上がるのは今日が初めてということでしたが、お客さんの反応はどうでしたか？」

仙台のお客さんはとてもいいですね。ここぞというときに大きな声で笑ってくれたり、話の展開を先読みして反応してくれたり。落語家は

笑い上手に助けられます。

「ここぞ笑ってほしい」という肝心のポイントで笑ってくれる人がいると、周囲はその人につられて笑つので会場全体が笑いに包まれます。今日はそういう笑い上手が多かったように感じました。

落語は演目自体を「お客さんと一緒につくる」というのも過言ではないと思います。私たちは最小限の言葉で落語を演じて、お客さんは「今の言葉や表情はこういう意味だ」などと連想しながら笑う。落語家とお客さんのキャッチボールで成り立つものですので、今日

のようなお客さんだと落語家も気持ちよく演じられます。

親子3代で落語観賞

「花座の魅力はどんなところだと思いますか？」
やはりお客さんとの距離

離の近さが一番の魅力。今日はわざと表情も動作も大げさに演じて、お客さんに迫力が伝わるようにしました。マイクがなくても声が届く距離もいいですね。やはりマイクから聞こえる声と生の声とは、臨場感が全く違

うと思いますので。そもそも落語はマイクなど通さないで披露していたものだから、原点に近い形で落語を聞けるのではないのでしょうか。
演じる方としてはこの距離感だとまかしが利かない、というのはとても緊張するところですが（笑）。いつもよりさらに力が入りますし、アットホームな雰囲気にも押し流されて「今日はこんなことをしてみようかな」とチャレンジもできます。

春風亭柳之助

Profile

1966年9月27日、鹿児島県生まれ。91年に柳昇へ入門し、翌年初高座に上がる。96年4月に「二ツ目」、2006年5月に「真打」に昇進した。座右の銘は「一つの語りが一つの笑いを誘う」という意味の「一語一笑（いちごいっしょう）」と、「一つ笑うことで命に健やかさを与える」という意味の「一笑健命（いっしょうけんめい）」。

「シニア世代ならではの落語の楽しみ方がありますか？」

落語は親子3代で楽しめるアトラクションだと思います。孫に付き合つて遊園地や動物園に行くのもいいけれど、落語なら子どもも大人も楽しめますよね。

花座は街中にあるので、出掛けるきっかけづくりにもなると思います。落語を見て、帰りに食事や買い物をしたり。いろいろと試してみてください。



大きな表情と動作でお客さんを楽しませる